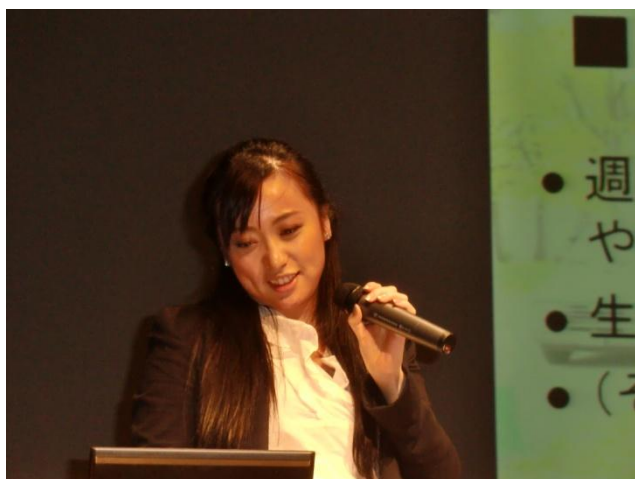


経済協力セミナー第 16 回

外大生が国際機関インターンか得られるものは何か？

講演者：太田 徹氏 中村 理香氏 宮木 朝子氏 安光 真理子氏

文責：永井哲平



今回の講演は、それぞれ国連人口基金 (UNFPA)、国連大学 (UNU)、国際移住機関 (IOM)、世界貿易機関 (WTO) でのインターンシップを終えた 4 人の先輩方を迎えて行われた。

講演者：太田徹氏

派遣期間：2010年3月22日～9月3日 国連人口基金

国連人口基金へのインターンシップ利用した国際協力専攻の修士2年、太田徹氏の講演では冒頭に組織の経歴、業務の説明が行われ、その後自身の国連インターンシップを通してえた情報、経験、知識、今後の進路の話がなされた。また、単なる報告

会に終始することなく、国連インターンシップを終えて、自分自身を客観的に評価し、良かった点・悪かった点・今後の進路を具体的にどのように切り開いてくかなど、自己分析についても詳細に話していただいた。氏は、国連職員というものが雲の上ではないと実感出来たこと、今回のインターンシップに意義を見出すことができたと言っていた。

1. UNFPAとは

UNFPAは国際機関の中では比較的新しい組織であり、1969年に国連開発計画(UNDP)の下部組織として設立された。その後、1972年、UNDPから独立。1987年、国連人口基金(United Nations Population Fund)に名称を変更。しかし、以後もUNFPAという略称を使用する。UNFPAの活動領域は3つ存在する。1つ目は、人口と開発であり、国勢調査における政府への支援。2つ目は、性と生殖に関する権利と平等の確保。3つ目は、ジェンダーの平等であり、とくに女性に対する教育・啓発活動を行っている。これら、3つの活動によって、“妊娠や出産に関する決定”をより良くすることがUNFPAの目的である。

2. インターンとして取り組んだ業務

UNFPAが取り組んでいる組織改革の調査と分析に取り組んだ。具体的には、文章の作成、ワードおよびエクセルを用いたデータの作成、各セクター代表のミーティングで使用する資料の準備を行った。

3. インターンシップの成果

1つ目に、勤務する人材の特徴や勤務に当たっての条件・環境などの、国際機関に対する理解が深まった。2つ目は国連職員とのネットワークであり、日本では難しい国連職員のネットワークに参加することが出来た。その他、国際機関への就職に関する豊富な情報、英語能力の向上、修士論文との部分的な関連付けが得られた。

4. 組織内・外職員とのつきあい

ニューヨークは周囲に国連機関が多く、日本政府国連代表部や他の国際機関職員、国連日本人職員会とのネットワークを広げることが出来た。また、国連に関するイベント・週末のホームパーティーなどに参加した。

5. 国際機関に対する心境の変化

インターンシップ前では国際機関は雲の上の存在と考えていたが、現在は現実的な方向性の一つととらえている。日本人学生にとっては、国際機関への就職・インタ

ンシップの情報・チャンスは限られており、そのような情報へのアクセスを確保することが大切である。

6. 今後の進路の方向性

国連開発計画東京事務所にてインターンシップを行っており、博士後期課程への進学も検討している。修士研究・インターンシップを生かせる職種としては、外務省専門調査員、開発コンサルタント、国際協力系財団法人、研究機関などがあげられるが、国際機関への就職を中・長期的な視野に入れてキャリアを積み、今後の可能性を探る予定である。

講演者：中村理香氏

派遣期間：2010年3月20日～9月18日 国連大学ニューヨーク事務所

博士前期課程、地域・国際専攻2年の中村里香氏は国連のシンクタンクとなる国連大学ニューヨーク事務所に6カ月のインターンシップを行った。国連大学でのインターンシップは、他の講演者と比べ、チームで組んで組織的に行動する機会が多かったという。今後の進路や目標などの具体的な説明は勿論のこと、太田氏同様に、国連職員として働くという目標の実現化への必要な条件がはっきりとし、国際機関が一種の憧れでなく現実味の増したものに変わった事などが話された。

1. 国連大学とは

1975年に設立、本部は東京都渋谷区である。年間予算は4,065万米ドル(2010年度)であり、そのうち80%は各国政府からの直接的に出資によって成り立っている。国連大学の主要な役割は、学者・研究者の国際的な共同体をテーマとしており、国連と世界の学術社会の「かけ橋」としての機能している。多文化的かつ国際的であり、チームとして活動する機会が多い分、競争が激しい職場であった。

2. 仕事内容

週1～2回、外部から研究者を招いて行われるイベントの運営、先行研究の調査・分析、次期JPF(Junior Professional Fellow Programme)リクルートチームのリーダーなどを行った。週5日はオフィス勤務をし、週末には大学の学生会や諸団体に催される様々なイベントに参加した。

3. 国際機関へのインターンシップを通してわかったこと

国連で好まれている英語とは、今まで習ってきた英語とは異なり、英語のノンネイティブの多い国際機関では誤解が少なく、わかりやすくあるべきである。セルフマーケティングなどが重要であり、長期的なキャリアプランと短期的なアプローチの関連性が必要である。また、日本人は消極的であると見られがちだが、国連機関では社会的で外交的な人物が好まれる。

4. インターンシップを通して感じた今後の課題

英語以外の言語の有用性と必要性、オフィスでの細やかな駆け引きのスキル、日本人であり女性であることのデメリットの克服が必要であると感じた。

5. 「インターンシップをしてよかった!」と思えること

国連本部では様々な会議が行われているが、そのような会議を通して、多様な国や文化、ポジション、経験を持った人に会え、話を伺える機会があった。また、オフィスで使う、誰の助けも受けない、”戦う英語”が身に付いた。国際機関で具体的にどんな人材が求められているのか分かり、これからの目標をはっきりさせることが出来た。

6. インターンシップを成功させる3つの鍵

- Academic Knowledge

学術的、専門的知識とその知識を信じてもらえるように伝えることのできる言語能力

- Human Quality

競争の激しい環境の中でも責任を持ち仕事をする事、様々な地域から国際機関に来ている人達との信頼関係の形成としてのNetworking、および、相手の望んでいる事と自分の評価を結び付けて行動すること

- Opportunity Scan

長期的なキャリアプランの作成と、仕事をする価値を見出すことの必要性

講演者：安光 真理子氏

派遣期間：2010年5月2日～7月30日 国際移住機関 人事部

2010年8月2日～10月29日 世界貿易機関 Trade Review Division

安光真理子氏は IOM(国際移住機関)と WTO(世界貿易機関)の2つの機関でインターンシップを行った。IOMでは人事部の仕事につき、IOMスタッフの能力向上を図るトレーニングに関する仕事を幅広く行い、WTOでは日本の通商政策に関する情報の収集や分析をして、Trade Policy Review Japan 2011の作成に携わった。氏は2つの機関で全く異なる業務を行ったが、どちらの機関においても上司の要求を先回

りして行動することの重要性を実感したという。今回のインターンシップ以前は国際機関を遠く感じていたが、IOM や WTO でのインターンを終えて国際機関への就職が現実的な選択肢の一つとなったと語っていた。

1. IOM での業務内容

世界中で開催される IOM スタッフの能力向上トレーニングのイベントの補佐を行っていた。具体的には、トレーニングの評価結果の作成、トレーニング記録の統計を最新版にアップデートする、トレーニング受講者からの質問対応である。

2. WTO での業務内容

Trade Policy Review (TRP) Japan 2011 の作成に必要な日本の通商政策に関する情報の収集・分析を行った。また、オフィスワークだけでなく、他の部署での各問題の専門家と TPR の原稿について協議、ポイントをまとめ上司に報告していた。

3. やりがいを感じる瞬間

ロジスティックな部分に完全に関与することは難しいため、上司の行動を予測し、それが成果につながった瞬間にやりがいをを感じる。また、WTO では調査結果を自分なりにまとめ、それが公的文書になった瞬間にやりがいをを感じる。

4. 国際機関に対する志望度

派遣前は憧れや現実味のない選択肢であったが、派遣後では「現実化のある選択肢のひとつ」であり、十分にあり得る世界であると考えている。

講演者：宮木 朝子氏

派遣期間：2010年517日～10月30日 国際移住機関 Genova HQ

宮木朝子氏は IOM (国際移住機関) でインターンを行った。非常に少人数の部署に派遣され、実に多忙な日々を送ったが、その分収穫は多く、自分の携わっている機関やその業務に関する知識が増えたのは勿論のこと、積極的な姿勢で自分がどういう人間であり、どのような魅力があるのかを知ってもらう大切さも実感した。自らの作成した原稿が現場のスタッフに影響を与えたなど、多くの成果を得た一方で、自らの英語力を向上させる必要があると感じ、特にビジネスの場で使用する英語能力は不十分であると語っていた。

1. IOM とは？

1951年、主として欧州からラテンアメリカ諸国への移住を支援するため設立された欧州移住政府間委員会(ICEM)が前身であり、国際機関でもNGOでもなく、政府間機関という表現がもっとも妥当である。

2. 成果

IOMの研究プロジェクトを通じてさまざまな分野に触れることで、Migration問題の概念の外観を獲得することが出来た。このインターシップを行ったのは本部であったが、自分の原稿がフィールドスタッフに与える影響を通して、本部とフィールドオフィスの関わり方や国際機関での組織構造を理解した。

3. 課題

英語でのメール、日常会話は上達したが、ビジネスレベルでの実力の無さを痛感した。また、IOMに対しても活動領域が広く、完全な理解が必要であると感じた。

4. 職員との付き合い方

上司がインターンに仕事を振る事を苦手としていたので、自らの興味・関心を積極的にアピールして、まずは同僚から自分がどういう人間であることを知ってもらった。

国際機関でのインターンシップを終え、内側から国際機関を見ることができた先輩方は一様に国際機関への就職を身近に感じる事が出来たと語っている。この講演を通して、学生たちは国際機関の業務をより具体的に知ることが出来、彼らの国際機関への興味は強く喚起された。講演の中では、とくに英語能力の重要性が強調され、中村氏と宇野先生との「戦う英語」の実践も行われ、学生には大きな刺激を与えたであろう。